

研究ノート

南仏ラングドック・ルシヨンにおける中世ロマネスク期の修道院と教会

中川 久嗣*

南フランスのラングドック・ルシヨン地方 (Languedoc-Roussillon) は、おおよそローヌ川西岸の現在のガール県あたりから、南西へ向けてエロー県、オード県、そしてスペイン国境のピレネー=オリエンタル県にまで至る地中海沿岸地域にあたる。古くからパリや北フランスで話されるフランス語とは異なる「オック語」を話す地域として独自の文化圏を形成する地域でもあった。さらにこの地方を有名たらしめたのは、中世における最大の異端である「カタリ派」で、この異端はおもに 11~13 世紀にこの地域で勢力を大いに拡大し、ローマ教会はこの異端を撲滅するために北フランスからの武力討伐軍を組織し（アルビジョア十字軍）、さらに異端審問裁判を続け、その根絶には長い時間と多大なる労力を払わなければならなかった。

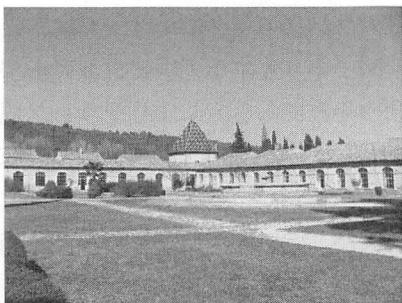
しかし異端カタリ派が猛威をふるっていたこの時代は、同時にまたラングドック・ルシヨン地方に数多くの修道院が建設され、その活動を展開した時代でもあった。これは実は意外な事実である。私たちの持つこの時代のラングドックはイメージは、一方で異端カタリ派によって破壊され、他方でそれを撲滅しようとするアルビジョア十字軍によってさらに荒らされる、荒廃した街や村や教会のそれである。しかしそうした荒廃の一方で、南仏の修道院文化の輝かしい開花が見られたのである。有名な美術史家エミール・マールによれば、12 世紀にトゥールーズ伯がシトー修道院にあてて送った書簡には「ラングドックでは異端がいたるところに浸透し、人びとは信仰を放棄し、教会は廃墟と化している」と書かれていたほどであったが、しかしそのような状況においても「われわれがその美しい教会正面を称讃するあの南フランスの修道院の多くは、すでに敵意のうずまく世界のただ中における信仰の砦となっていたのである」（『ロマネスクの図像学』）。12 世紀、南仏ラングドックにおける修道院は、猛威をふるう異端に対するカトリック教会の防衛・抵抗の砦であったのだ。以下ではおよそ 12 世紀を中心として、その前後の 11~13 世紀も含めて、いわゆる「ロマネスク」時代にラングドック・ルシヨンに隆盛し花開いた多くの修道院の中から主要なものを選んで、その歴史や修道院・聖堂の建築や装飾などについて説明と考察を加えてゆきたい（なお今回は、ラングドックの最北部にあるロゼール県については触れない。また参照した文献等は、最後に一覧を記す形とした。掲載した写真はすべて筆者が撮影したものである）。

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教授

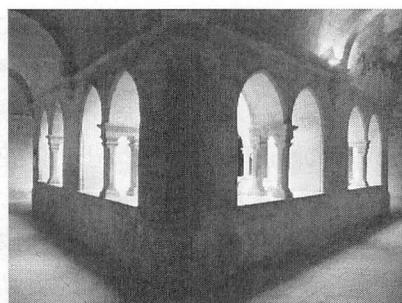
1. ガール県 (Département du Gard)

1.1 ヴァルボンヌ修道院 (Chartreuse de Valbonne, Saint-Paulet-de-Caisson)

ラングドックの東部にあってプロヴァンスに接しているのがガール県であるが、ヴァルボンヌはその北端に位置する（アルデッシュ県との県境近く）。ここは、ユゼス司教であったヴェネジャンのギヨームが1204年に創建したカルトジオ会（シャルトル会）の修道院である。その後フランス革命期の一時的な混乱を除いて、この修道院はヴァルボンヌの谷で活動を続けてきた。現在は医療施設として存続している。現存するヴァルボンヌ修道院は、その多くの建物が15世紀以降のもので、時代が比較的新しい。外から近づくと、まるでブルゴーニュを思わせるような屋根模様装飾が最初に目につく。カルトジオ会は修道士の共同生活という形を取りながらも、彼らの孤立・独立性を重視していた。それが修道院建築における個室の重視にも現れている。17世紀の大クロワトル（grand cloître）は巨大で、広大な中庭を囲む周廊は一辺が100メートル以上あり、かつてはその回廊の周囲に修道士たちの独居房が並んでいた。その大クロワトルから修道士の食堂（réfectoire）を隔てて13世紀の小クロワトルがある。狭いために非常に閉鎖的な印象を受ける。一辺がせいぜい20メートルで、2本ずつひと組になった小円柱に尖塔アーチが載っている。小さな中庭には井戸がある。小クロワトルはこの修道院の歴史的な古さを感じさせる唯一の場所であろう。



ヴァルボンヌ修道院



13世紀のクロワトル

1.2 ヴィルヌーヴ=レ=ザビニヨンのサン=タンドレ修道院

(Abbaye Saint-André de Villeneuve-lès-Avignon)

ヴィルヌーヴ=レ=ザビニヨンは、14世紀に教皇庁が置かれたアヴィニヨンとローヌ川をはさんで対峙する街で、修道院はこの街の丘の上の城壁に囲まれた城塞（サン=タンдре要塞）の中にあった。12世紀にはフランス王権が南フランスに拡大し、ルイ8世は、この城塞をサン=タンдре修道院長と共同領主として統治した。その後サン=タンдре修道院は、フランス革命まで王権の強い庇護のもとで存続することとなった。

私たちが実際にここを訪れると、目に入るのはその頑強な城壁とともに、その内側に建てられている2つのロマネスク様式の小さな礼拝堂である。ノートル=ダム=ドゥ=ベ

ルヴゼ礼拝堂（Chapelle Notre-Dame-de-Belvezet）は、要塞敷地内の西端の城壁のすぐ内側に建っている。それは小さな聖堂で、内部は祭壇が置かれた礼拝室と二階建て構造になったナルテックス風の空間からなる。天井は礼拝室部分もナルテックス様部分もともに半円筒ヴォールトである。後陣は五角形で半円形の装飾アーチがそれぞれの面に施されている。開口部は、後陣に小さな十字架様の窓、南側の側壁に半円アーチの細長い小さな窓が二つ、東西の壁にひとつずつ開けられている。もともとの建設は12世紀であるが、後の時代に手が加えられて比較的美しい状態を保っている。内部の壁に、彩色されたキリスト磔刑図が残されているが（ただしかなり摩耗していて色も薄い）、これは14～15世紀以降のものと推定される。

サント=カザリー礼拝堂（Chapelle Sainte-Casarie）は、サン=タンドレ要塞の東半分の現在のサン=タンドレ修道院敷地内の岩場の上に立てられたごく小さな箱形礼拝堂である。形は長方形というよりも正方形に近く、あらい石積みの壁などを見ても、ノートル=ダム=ドゥ=ベルヴゼ礼拝堂よりも古いものであることがわかる。実際、もともと建設されたのは11世紀である。6世紀の聖人である聖カザリーが暮らしていた洞窟の上に建てられている。後陣は半円形の平面プランで、後陣側から見ると、この小聖堂が岩の上に建てられている様子がよく分かる。後陣自体には開口部はないが、聖堂の各面に小さな窓が開けられている。青い空を背景に糸杉とともに建つこの礼拝堂は、いかにも南仏プロヴァンスの趣きがありとても美しい光景である。このほか、サン=タンドレ要塞の中には修道院が残した美しい庭園もある。



ノートル=ダム=ドゥ=ベルヴゼ礼拝堂



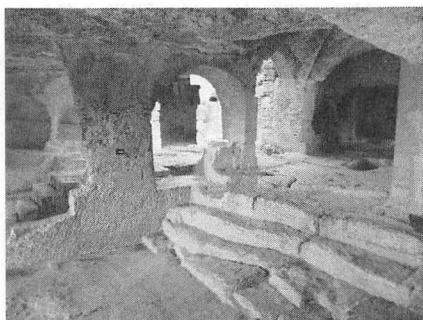
サント=カザリー礼拝堂

1.3 ボーケールのサン=ローマン修道院（Abbaye Saint-Roman de l'Aiguille, Beaucaire）

サン=ジルから北東へおよそ30キロ、ボーケールの街からはローヌ川沿いに北におよそ5キロの小山の上にある。「修道院」と言っても、およそ普通の修道院の光景を想像してはならない。大きな岩山に穴をくり抜くようにして作られている、いわば「洞窟修道院」のごとくである。この岩の洞窟には、先史時代からすでに人が住んでいたが、5世紀終わり頃にキリスト教の隠棲者が住みつき、7世紀頃にはベネディクト会修道士の共同体が存在したらしい。文字資料にこの修道院が現れるのは11世紀である。12世紀

には修道院 (abbaye) から小修道院 (prieuré) となる。14世紀には教皇ウルバン5世によって修道士養成のための教育施設が置かれた。しかし16世紀になると修道院としての役割が失われ、要塞となつた。しかしそれも17世紀には放棄され、19世紀にはその痕跡もわずかとなつてしまつた。20世紀に入つて発掘調査が進められた結果、「歴史的建造物 (monument historique)」に指定された。

実際にここを訪れてみよう。ボーケールからはクルマで行くしかない。ローヌ川沿いの県道から西に少し入ると駐車場があり、そこにクルマを置いて小道を20分ほど登る。小山の上の大きな岩塊にうがたれた洞窟状の聖域が私たちを迎えてくれる。礼拝堂、身廊、大型室、圧搾室、独居房などがある。礼拝堂の天井は、太い四分交差リブ・ヴォールトで支えられている。またその壁の一部には、修道院長の聖座が彫って作られている。さらに床にはいくつもの墓穴が掘られている。その大きさは大小さまざまである。礼拝堂の隅には12世紀の柱頭が置かれている。さらに岩塊の上のテラス部分に出ると、かつての修道士たちのものと思われる、岩にあけられた多数の墓穴が所狭しと並んでいる(その多くは頭部のついた人の形をしている)。ローヌ川からヴァントゥー山まで至るプロヴァンスのパノラマを見渡すその墓穴群の光景は、不思議であるとともに壯觀である。



サン=ローマン修道院礼拝室

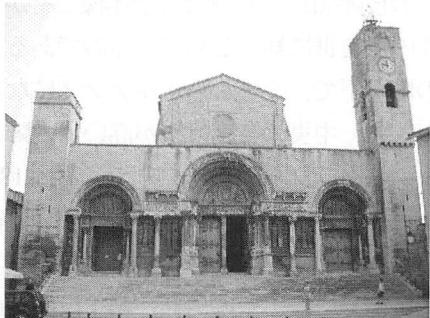


墓のテラス

1.4 サン=ジル=デュ=ガール (Saint-Gilles-du-Gard)

ニームのおよそ20キロ南にある。伝説によれば、8世紀に聖ジルがギリシアからプロヴァンスにやって來た。数々の奇跡(中でも雌鹿の話は有名)を起こしたこの聖者の死後、彼が埋葬されたこの地には、大修道院が建てられ、数多くの巡礼を呼び、有名なサンチャゴ・デ・コンポステーラ巡礼の主要ルートのひとつの起点となつた。このサン=ジル修道院は11世紀にはクリュニー会に属したが、独自に修道院長を選ぶ権利を有していた。13世紀には、巡礼の減少やエグ=モルトとの勢力争いなどもあって斜陽期に入り、16世紀には司教座聖堂参事会の管理下に入った。16世紀以降は宗教戦争によって大きな破壊を被り、続く17世紀には建物の規模が半分になつてしまつた。

現在残るのは上半分がなくなってしまったファサード、新しい上部教会の身廊と内陣、地下クリプト（聖ジルの墓がある）などである。現在の後陣の後ろの敷地に、かつての旧内陣（フランス革命時に破壊）の遺構が残るが、いわゆる「サン=ジルの螺旋階段」の残骸が有名である。しかし最もサン=ジルの名を世に知らしめているのは、何と言っても下半分が残る教会西ファサードであろう。アルルのサン=トロフィーム教会とともに、中世12世紀ロマネスク時代におけるプロヴァンス彫刻の代表とも言えるものである。古代ローマの凱旋門の形式を取りながら、三つのポルタイユに精巧な円柱彫刻やフリーズが配されている。中央のタンパンは四大福音史家に囲まれた栄光のキリスト、向かって右のポルタイユはキリストの磔刑、左は東方の三博士の礼拝である。その下には帶状のフリーズが連なり、キリストのさまざまな事蹟を物語る。さらにその下の壁龕には使徒たちがいる。中央のポルタイユの小円柱の基壇部分には、カインとアベル、ライオン、男鹿とそれに向かって弓を引くケンタウロス、などの彫刻が置かれている。西ファサードに置かれたさまざまな彫刻群には、古代からの影響が大きい。しかし単なる古代の模倣ではなく、古代をロマネスク的にアレンジしたものであり、さらにここからサン=ジルの影響がイタリアその他の地域に伝わっていったとも言われている。ともかくも、12世紀の巡礼たちは、サン=ジルにおいて聖ジルの墓を訪れ、これらの彫刻群を目にし、そしてここを出発してさらにピレネーを越えて長く困難な巡礼路をたどりスペインへと向かっていったのであった。



サン=ジル=デュ=ガールの西ファサード

2. エロー県 (Département de l'Hérault)

2.1 サン=ギレーム=ル=デゼール (Saint-Guilhem-le-Désert)

ここには、ラングドックでも最も有名な修道院とその教会がある。その歴史は、804年にヴェルデュス川渓谷のジェローヌの荒れ地に修道士たちの共同体が作られたことに始まる。その後トゥールーズ伯ギヨーム（オック語でギレーム）はこのジェローヌ修道院をアニアヌ修道院の管理下に置いた（彼はここで812年に亡くなっている）。しかし10世紀以降、次第にアニアヌから自立しようとする勢力を獲得してゆく。この2つの修道院は、1025年には有名な「悪魔の橋」を共同で建設したりしているが、ライバル関係も続き、1090年になって教皇ウルバン2世がジェローヌ修道院の自立を認めることで決着がついた。ジェローヌ修道院はサン=ギレーム=ル=デゼール修道院となり、12世紀には多くの巡礼も訪れた。また13~14世紀にはロデヴ司教としばしば対立したが、15世紀には劣勢となった。さらに16世紀にはプロテスタントによる略奪もあって修道士の数

も減っていった。フランス革命の際には建物が売りに出されてしまった。修道院の荒廃は 1840 年に歴史的記念建造物の指定を受けることによってようやく止まったのであった。

サン=ギレーム=ル=デゼールは、「悪魔の橋」からエロー川沿いにおよそ 4 キロ上流にのぼる。村の入口には現在は観光案内所として使用されている小教会があり、そこからヴェルデュス川と平行して続く村の細長い道を歩くと、ほどなく修道院教会の大きくて美しい後陣がその姿を現す。斜めに切り取られた大きな付け柱が 2 ついた半円形の後陣には、上部にこれもまた内部に向けて傾斜して切り取られた小さめの半円形盲アーチ（それぞれが小円柱に支えられている）の列と、歯車状の帯装飾がつけられている。下部には大きめの開口部が開き、これにも両側に小円柱がつく。その小円柱の柱頭彫刻はパルメットなどの植物文様である。中央の後陣の左右には装飾仕様の異なる小後陣がある。向かって右側の小後陣には小円柱のついたアーチ（窓と盲壁が交互に並ぶ）、左側のそれには地面まで伸びるロンバルディア帯（細長い半円頭部の窓）がついている。この後陣側からの教会の全体像こそが何にも増して美しく、サン=ギレーム=ル=デゼールの名を世に知らしめているのである。教会堂の入口（歯車状の帯装飾がつく）は西端の塔の下で、そこからナルテクスになる。内部は、半円形トンネルヴォールトの載る三廊式で、中央の身廊は背が高い。内陣の下にはこの修道院の創設者トゥールーズ伯ギヨームのクリプトがある。墓や遺物は 1817 年の大洪水の際に破壊されて失われたという。クロワトルに出ると、教会堂南側の側壁の光景が目を引く。回廊、教会堂の側廊壁、身廊壁と三段構えになった壁に、一番下は回廊の小円柱とアーチの列、そのうえには縦に長いロンバルディア帯の列が並ぶ。中庭の糸杉や貯水池などとともに、いかにも南フランスの雰囲気を美しくかもし出している。クロワトルの一角（西側）には、この修道院ゆかりの遺物を集めて展示する碑文展示室がある。



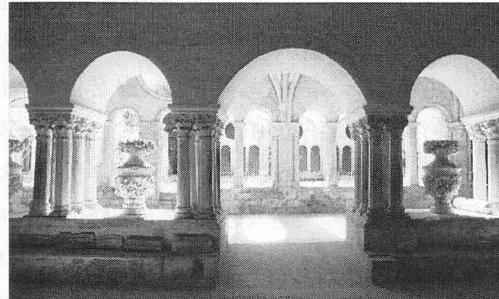
サン=ギレーム=ル=デゼールの後陣

2.2 ヴァルマーニュ修道院 (Abbaye de Valmagne, Villeveyrac)

ヴァルマーニュのサント=マリー修道院 (Abbaye Sainte-Marie de Valmagne) とも言う。モンペリエの南西およそ 30 キロに位置するこの修道院は、フォントゥヴロー修道会のもとで 1139 年に創建された。しかしベジエの副伯レイモン・トランカヴェルの保護を得てカドゥアン修道院の影響下に入り、聖ベネディクトゥスの戒律に従った。1144 年にはシト一会に帰属、アルビジョワ十字軍に際しても積極的な役割を果たしている。しかし 14 世紀からは悪天候や飢饉、ペストなどの疫病、百年戦争の影響を受けて衰退した。15 世

紀には修道院外聖職者大修道院長 (abbé commendataire) がこの修道院を管理したが、16世紀の宗教戦争期の混乱の後、放棄され荒廃した。17世紀にはいったん復興の動きが見られるが、大革命の際に最後の修道士もいなくなり（逃亡）、ついには売却されて、ワインの貯蔵庫となってしまった。19世紀にテュレンヌ伯がここを購入し、修道院の建物を修復するとともに、周辺のぶどう畠も整備し、この一族の子孫の管理のもと、今日では一般に公開されている。

修道院は付属教会、クロワトル、付属施設からなる。教会は14世紀のゴシック様式であるが、西ファサードは左右の塔とその間のテラスなどの外観から、教会というよりもあたかも宮殿や城館を思わせる。内部はがらんとしていて側廊部分には巨大なブドウ樽が並んでいる。内陣は尖頭アーチが並び、放射状のリブ・ヴォールトに支えられている。クロワトルは小円柱に支えられた半円形アーチが並び、その上にさらに大きな丸窓が開けられている。クロワトルに面して12世紀の建物が建てられていて、そのうちの参事会室 (salle capitulaire) は、精巧な柱頭彫刻のついた6本で一組の小円柱と半円形アーチで回廊から隔てられており、天井には模様が彫刻されたスパンの長い交差リブが見られる。クロワトルの中庭（南側）には、ヴォールトがなくリブだけの泉水堂が残っている。ここは修道士たちの洗濯場でもあった。ヴァルマーニュ修道院ではブドウ栽培とワイン醸造も手がけていて、修道院の売店で良質の修道院ワインを購入して味わうこともできる。



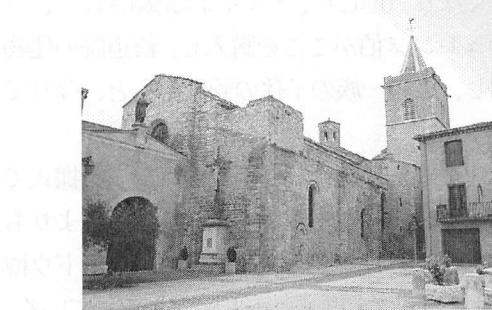
ヴァルマーニュ修道院のクロワトル

2.3 カラントのサント=マリー教会 (Église Sainte-Marie de Quarante)

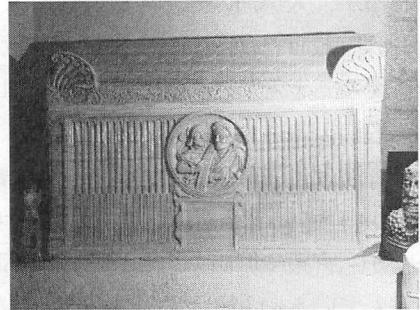
ベジエの西方約20キロにある。もともとはカラントの大修道院付属教会である。10世紀、ナルボンヌ副伯によって、聖アウグスティヌス会の会則による聖堂参事会員の共同体がこの場所に創立された。その後すぐに修道院となり、長い間ナルボンヌの司教の監督下にあった。修道院は1791年に閉鎖された。

教会は村の広場に面しており、西ファサードには後の時代に建てられた建物が付属していてそこから内部に入るようになっている。方形の塔も比較的新しい。高さのある後陣の外部には付け柱と半円形アーチの開口部が上方に並ぶ。基壇まで縦に延びるロンバルディア帯も一部に残っている（それは南側の側壁上部にも続いている）。教会内部は三廊式で半円形の円筒ヴォールトである。六角形の小塔が載るクーポールは四隅を扇状のトロンプに支えられている。堂内には1世紀（あるいは3世紀）頃の大理石製の見事な古代の石棺が置かれている。その中央のメダイヨンには夫婦の姿が彫刻されている。

その両側に並ぶ縦縞の繊細な装飾が美しい。内陣には大小2つの祭壇テーブルがあり、その両者とも上盤は円形の装飾で四方を縁取られている。11世紀の作品である。



カラントのサント=マリー教会



古代の石棺

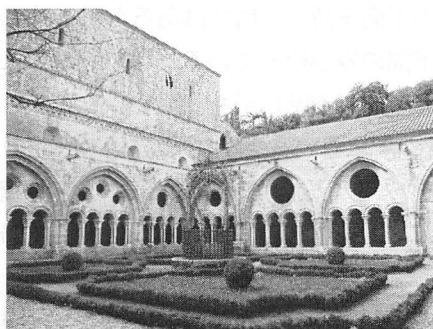
3. オード県 (Département de l'Aude)

3.1 フォンフロワド修道院 (Abbaye de Fontfroide, Narbonne)

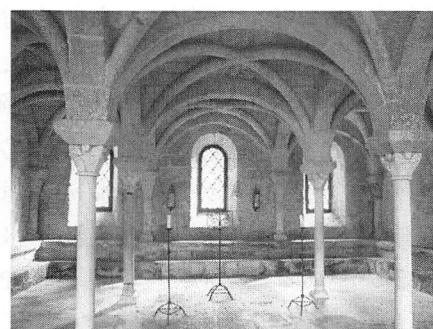
ナルボンヌの南西およそ 15 キロの丘陵の谷間にある修道院である。もともとは 1093 年にナルボンヌ副伯エイメリック 2 世の提供した土地に修道士が住みついたのが始まりである。その名前の由来のとおり、冷たい泉が湧いていた場所であった。最初はベネディクト会の戒律に従っていたが、12世紀中頃にクレルヴォーの聖ベルナルドゥスがラングドックにやってきて以降シトー修道会の戒律を採用した。異端カタリ派との戦いの時代には、このフォンフロワド修道院出身のピエール・ド・カステルノーが活躍している（ただし彼は 1208 年にサン=ジルで暗殺された）。13~14 世紀はフォンフロワド修道院の最盛期である。多くの土地の寄進を受けるとともに、精神的威信も高まり、さらに多数の修道士を集めることとなった。教会組織の中で榮達する者も出たが、中でもアヴィニヨン教皇時代にアルノー・ヌーベル (Arnaud Nouvel) やジャック・フルニエ (Jacques Fournier) が枢機卿となり大きな影響力を振るった（後者はのちに教皇ベネディクトゥス 12 世となる）。しかし 15 世紀からは衰退に向かう。財政的にも逼迫し続け、ついには 1764 年に大修道院の地位を失い、修道士の数も 10 名ほどになってしまった。大革命の後 1791 年には最後の修道士も去り、修道院は売りに出されたが買い手がいなかつたため、施療院に変えられたりした。その間に、一部の柱頭彫刻などが奪われたりした。1843 年に歴史的建造物に指定された。1858 年にプロヴァンスのセナンク修道院から再びシトー修道会士を受け入れた。しかし彼らもほどなくここを去ってしまった。1908 年になって、ギュスターヴ・ファイエ (Gustave Fayet) がこの修道院を再度買い取り、全面的な修復工事を行った。現在もその子孫がここを維持している。

実際の訪問は、修道院北側の入口から下級（非叙階）修道士の食堂の建物（12世紀。ホールになっていて、大きな交差リブに支えられている。2階は寝室）を通って、大き

な「レイ 14 世の中庭」に出る。修道院の居館に囲まれた美しい中庭である。さらに南側の建物（尖頭形トンネル・ヴォールトの大きくて美しい食堂その他）を抜けると、クロワトル（14世紀）に出る。中央に井戸があり、その周囲を列柱廊やアーケードが取り囲む。とりわけ西側と南側は、軽快な植物の柱頭彫刻のついた2本ひと組になった小円柱とその上の半円形アーチが並ぶ。アーチは4つずつひと組となってさらに大きな尖頭形のアーチの中に収められている。その大アーチには1つあるいは3つの円形の窓が開く（その大きさはそれぞれが少しずつ異なる）。北側には小円柱の列ではなく、尖頭形の大きなアーチが並ぶ。また東側にはそうした大きなアーチと、小円柱列を収めた大アーチが交互に並んでいる。東側の大アーチに開けられた丸窓は大きなものである。クロワトルを囲む列柱廊の天井は交差リブ・ヴォールトである。クロワトルの東側に参事会室（*salle capitulaire*）がある。幾何学的とも言える植物彫刻が柱頭に施された繊細な4本の小円柱が部屋の中央にあり、壁側にはさらに短い円柱が埋め込まれて、丸くて太い交差リブ・ヴォールトを支える。ヴォールトは合計9つの区画に分けられてこの参事会室を構成している。12世紀の付属教会堂には、西ファサードにロマネスクの門がある（チェック柄文様の中にキリストの磔刑が彫刻されている）。後陣は巨大ながっしりとした東壁の外に、五角形の主後陣、その左右にやはり五角形の小後陣が並び、それぞれに2つの大きな控え壁がつけられている。内部は三廊式であるが、南側に14世紀の側廊が増設されている。後陣には小さな窓があり、さらに後陣壁の上部に大きめの窓が開く。西ファサード側にも縦長の窓と巨大な丸窓が開いているが、堂内の全体的印象は暗い。天井は尖頭形のトンネル・ヴォールトである。フォンフロワ修道院は、12世紀から時を越えて今日までその姿をよく保存しており、20世紀以降ここを修復・維持している所有者の並々ならぬ努力がよく認められるものであると言えよう。



フォンフロワ修道院のクロワトル



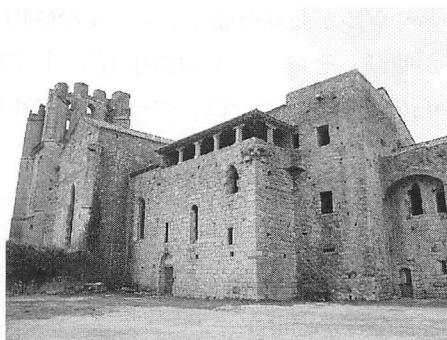
参事会室

3.2 ラグラスのサント=マリー修道院（Abbaye Sainte-Marie de Lagrasse）

創建についての正確な年代などは不明であるが、伝説によるとシャルルマーニュが、9世紀初め頃にアニヌのベネディクトゥス（後のナルボンヌの大司教）に修道院建設の許可を与えた。シャルルマーニュの威光もあって、この修道院は多くの土地、村々、

城、教会、小修道院を従え繁栄した。その中には、サン=マルタン=ドゥ=カニグー、サン=タンドレ=ドゥ=ソレド、サン=ポリカルプなども含まれる。修道院長は封建領主のごとき強力な権力を保持した。しかし百年戦争期から衰退が始まる。17世紀にはサン=モール会 (Congrégation de Saint-Maur) の改革を受け入れて、みずからの勢いを回復している。18世紀には修道院長アルマン・バザン・ドゥ・ブゾンのもとで、クロワトルを含めたいくつもの建物が建設された。しかし大革命の際に修道士がみな離れ、軍の病院に変えられ、その後2つに分けて売りに出されてしまった。一方は20世紀になって「悲しみの聖母修道会」の修道女たちが老人のための施療院をここに設立した。これは1975年まで続いた。またもう一方の部分は軍の叙勲者団体による孤児院なども運営されたが、これは1981年まで続いた。現在ではそれがオード県と「神の母参事会」 (Chanoines réguliers de la Mère de Dieu) によって管理されている。

サント=マリー修道院は、オルビユ一川をはさんでラグラスの集落と対峙する形で建っている。古くからある修道院部分と、18世紀以降に新しく建てられた部分に分けられるが、今日私たちが見学可能なのは、前者の古くからの部分のみである。受付で入場券を買って進むと、旧居館の中庭に出る。単純な装飾の彫られた柱頭の載る柱が、二階部分の木製バルコニーを支えている。柱頭の一部には猿も彫られていて、そのモチーフは、サン=ミシェル=ドゥ=キュクサやセラボンヌなどのピレネー地方に見られるのと共通のものである。さらに進むと広くて大きなホール状の貯蔵室がある（1階部分）。粗い石を積み固めた半円形の背の低い円筒トンネル形式である。その2階部分は、やはり大きくて広い修道士たちの寝室である。寝室と言ってもやはりホール状の空間で、いくつもの横断アーチに支えられた木製の天井である。この建物の隣にはパン焼き室があり、さらにその南側には、この修道院で最も古い9世紀～10世紀の「プレ・ロマネスクの塔」がある。カロリング朝時代のもので、長方形の平面を持つ。塔ではあるが、背は比較的低く、もともとはもう少し高かったが、その下部のみが残っている。塔の南側には修道院付属教会堂（その東側、すなわち後陣側は完全な平面壁）があり、その左右（南北）にそれぞれ11世紀のロマネスク時代の礼拝堂の後陣が残り、現在の教会堂の南北のトランセプトを形成している。北側のそれは後の時代の平面壁の中に隠れてしまっているが、南側のそれは、ロンバルディア帯のつけられた半円形の3つの後陣がそのまま外部に見えており美しい趣がある。その後陣の南には、この修道院全体を見下ろすようにしてがっしりした高い方形の塔が建っている。見る者に、まるで軍事要塞の塔のような印象を与える。今日ではこの塔、南側トランセプト、付属教会堂、大クロワトルなどは非公開部分となっており、見学者にとっては残念なことであると言わざるを得ない。



ラグラス修道院



コース=ミネルヴォワの後陣

3.3 コース=ミネルヴォワ (Caunes-Minervois)

ここは有名な城塞都市カルカッソンヌから北東におよそ 20 キロに位置する小都市である。8世紀終わりに聖アニアンがシャルルマーニュの後ろ盾を得て、サン=シニアン修道院とともに、この地にベネディクト派修道院を創建したのが始まりと言われる。10世紀には数多くの聖人の聖遺物を集めている。その後カルカッソンヌやバルセロナの伯権力の庇護を受けるが、12世紀から13世紀にかけてはベジエ副伯であるトランカヴェル家の援助のもと勢力を増した。コース修道院長は、カタリ派撲滅の動きの中でも積極的な働きを見せている。1227年には異端カタリ派の司教ピエール・イサムが、ナルボンヌ大司教の命によりコースにおいて火刑に処せられている。15世紀以降、財政的な危機に見舞われるが、17世紀にサン=モール会に所属することで再びその活力を取り戻す。荒れていた建物も再建された。しかし大革命に際しては打撃を免れず、付属教会 (L'église Saint-Pierre-et-Saint-Paul) ほか修道院の建物も売りに出されてしまった。1986年からコース=ミネルヴォワのコミューンによる再建が始まり（ただしサン=ジョゼフ=ドゥ=クリュニー姉妹会が所有する修道院長の居館は除く）、現在に至るまで修復や維持が続けられている。

修道院の実際の訪問は、修道院付属教会北側の広場から中に入る。教会北側のポーチは13世紀のものである。柱頭彫刻のついた左右3本ずつの円柱が3重のヴェーネルを支えている（それを含めて5重のアルシヴォルトである）。教会自体はゴシック様式である。教会の南側にはクロワトルがあるが、時代的には新しいもので、ロマネスク的な視点からは特に見るべきものはない。内陣の下には、後陣回廊の形をした8世紀の地下クリプトの遺構が残る。かつては聖人の聖遺物などが安置されていた。教会のトランセプトのさらに両側にそれぞれ塔が建っている。北側の塔は上半分が三階建てで各階に半円アーチの開口部が四方の各面に二つずつ並ぶ。南側の塔は最上部に半円アーチの開口部が四方各面に二つ並ぶ。この二つの塔とさらに小後陣に左右をはさまれて、教会堂の主後陣がある。その外側は上下2層からなり、下の層の壁には8本のローマ風の円柱が付け柱として付き（左右の両端には四角い付け柱）、それぞれに柱頭彫刻が載る。それら

は11世紀の初期ロマネスク期のもので、太い茎やツルが曲線を描くシンプルな植物文様である。上の層には9つの半円形アーケードが並び、そのうち3つは開口部として内陣に光を取り入れている。教会の後陣の外側からのこの光景こそは、コヌ=ミネルヴォワ修道院でもっとも印象的なものであろう。

4. ピレニー=オリアンタル県 (Département des Pyrénées-Orientales)

4.1 サン=ジェニ=デ=フォンテーヌ (Saint-Génis des Fontaines)

ピレニー=オリアンタル県は、ピレニー山脈の地中海側の東部地域にあたる。サン=ジェニの修道院は、修道僧サンティミールが800年頃に泉の湧き出るこの地に創建したのがその始まりである。10世紀には勢力を増すが、ノルマン人の襲撃を受けて、いったんは破壊された。その後ルシヨン公とエルヌ司教の力によって修道院付属教会の再建が進められた。11世紀にはクリュニー修道会に属した。さらに13世紀には大クロワトルが教会の北東に作られた（それ以前の古いクロワトルは現存しない）。しかしそのあと凋落が徐々に進み、1507年にはスペイン・カタルーニャのモンセラート修道院に服属することとなった。1659年のピレニー条約によりルシヨンがフランスに帰属したのちもそれは続いた。大革命の際には修道士が1～2名を除いてほとんどいなくなってしまった。その後修道院は複数の所有者に売却されたが、19世紀になって地元コミューンに譲られた。クロワトルについても、やはり大革命後に複数に分割されて売却・破壊され、柱頭彫刻も散逸したが、そのち複製なども含めて、20世紀後半になってようやく今の形に落ち着いた。

サン=ジェニ=デ=フォンテーヌでおそらく最も有名なのは、付属教会 (L'église abbatiale Saint-Michel) の西ファサード入口の上にはめ込まれている大理石のリンテル（まぐさ）の彫刻であろう。1019～1020年頃に作られたもので、横2.21メートル、縦0.8メートルである。その中央には二重の円球を背にして「祝福するキリスト」がいる。右手で祝福を与え、左手に聖書を持っており、その表情はふくよかでほがらかである。これはイエス・キリストを表現したロマネスク彫刻最古の例とされている。それまでキリストを偶像として表現することは行われていなかったため、このサン=ジェニのリンテルは、中世キリスト教芸術の歴史の中でも画期的な例であると言われるのである。キリストの背後の二重の輪を、左右両側から二人の天使が支え持つ。さらにその両側には円柱と馬蹄形アーチ列の中に、まるでこけし人形のように左右三人ずつ使徒たちが並んでいる。アンリ・フォションの言いういわゆるロマネスク彫刻の「枠組の法則」をそのまま体現したかのような光景と言える。キリスト、天使、使徒たちは、すべて衣類の襞まで細かく彫刻されている。リンテル全体を四角く縁取るのは連続するパレメットの植物文様である。リンテルには碑銘が残されていてそれによると「敬虔王ロベールの統治24年目に」そのリンテルが作られたという（ここから制作年が同定できる）。

サン=ジエニ=デ=フォンテーヌのクロワトルはルシヨン地方のロマネスク様式のものとしてはかなり遅い時代（13世紀後半）に属する。20世紀になってから修復の手が入っているが、一部は13世紀の柱頭彫刻が残る。植物、鳥、人魚、怪獣、不思議な人面、キリストの磔刑などのモチーフが並び、中にはカメまで見られるのが面白い。



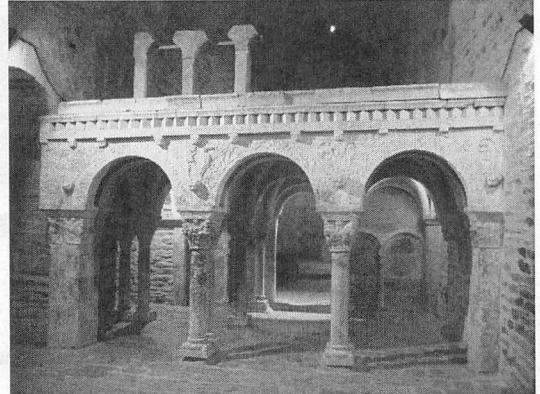
サン=ジエニ=デ=フォンテーヌ教会西ファサードのリンテル

4.2 セラボンヌ小修道院 (Prieuré de Serrabone, Boule-d'Amont)

近年ではカタルーニャ語を用いて「セラボーナ」(Serrabona)とも言う。1082年にセルダニュ副伯レーモン・ベルナールが、すでにそこで共同生活をしていた僧侶たちのために小修道院(prieuré)を建設した。1151年（または1152年）から拡張工事が行われ、聖堂の後陣とトランセプトが付け加えられた。また北側の側廊と南側のギャラリー、そして身廊内にある有名なトリビューンなどもこの時代のものである。13世紀まで栄え、この地方に靈的な光波を放っていたが、14世紀には繰り返しここった疫病などにより衰退が始まり、16世紀になって修道院としての活動は停止する。その後、ソルソナ大聖堂（現在のスペイン・カタルーニャ）の管理下に置かれるが、時とともに放棄され、ついには忘れ去られてしまった。19世紀に「歴的建造物」に指定されて以降は修復工事が進められ、今日ではピレネー=オリアンタル県の管理のもとにある。

教会の外観は、全体として片岩の平たい石積みで統一され、素朴で簡素であるが、外から見ると装飾の類もないで重く暗いイメージを感じさせる。方形のがっしりした塔（12世紀）が教会の隣に付随している。教会内部には西ファサード横の入口から入る。入口の部屋を抜けるとすぐに、セラボンヌの山並みを見渡すことのできるギャラリーに出る。2本ひと組の小円柱が4組で半円形アーチ6つを支えるアーケードである。その小円柱の柱頭彫刻には、ルシヨン・ピレネー地方によく見られるモチーフが並ぶ。口から腕を出すサル（ヒヒ）、体をアクロバットのように曲げたライオン、あるいは両足が翼になった恐ろしい顔を持つライオン、大きな翼を持つ鳥、大きな葉を広げるパルメット、そしてそれらのモチーフの間からこちらを見る不思議な人物の顔。ギャラリーから

教会の身廊に入ると、そこは11世紀の最も古い部分にあたる。有名な赤大理石のトリビューンが身廊のほぼ中央部にある。後陣側から見るとただの石の壁であるが、西側にはリブ・ヴォールトを支える柱の列（交差ヴォールトによる区画は6つ）と、一番西側の面に見事な彫刻を施したアーチ壁がある。柱の柱頭彫刻は、南側ギャラリーと同じように、恐ろしい顔のサル、ケンタウロス、武装した天使（大天使ミカエル）、翼となった両足を口にくわえる奇妙な怪獣、それらの間から顔をのぞかせる不思議な人物、などなど。西側アーチ壁には、四大福音史家たち（ライオン、ワシ、ウシ、人間）や神の子羊（キリスト）、人間や動物の奇妙な顔、唐草文様と混じり合う鳥獣、西ゴートの伝統を想起させるパレメットやこぶし花の連続文様など。あたかも中世ロマネスクの深遠なミクロ・コスマスが繰り広げられるかのような様をそこに見てとることが出来る。大革命以降、この南フランスの山地の奥に打ち捨てられ忘却された廃墟の中に、遺物として當々と残されていた様子を思い浮かべると、千年にもわたる長い時の流れの言いようのない不思議を感じずにはいられない。



セラボンヌ小修道院内陣のトリビューン

4.3 サン=マルタン=デュ=カニグー修道院 (Abbaye de Saint-Martin du Canigou)

ペルピニヤンから西へ約45キロにあるプラード(Prades)、さらにそこからヴィルフランシュ=ドゥ=コンフランをへて南へ約10キロでカステイユ(Casteil)まで行き、そこから登山道を登るとサン=マルタン=デュ=カニグー修道院に至る。高度は1000メートルを越える。

1007年にセルダニュ伯ギフレ（またはギフレード、Guifred de Cerdagne）がこの地に修道院を創建した（教会の建設自体は997年に開始）。その後1009年にエルヌ司教オリバ(Oliba、ギフレの弟)によって聖別式が行われた。ギフレ自身はこの地に隠遁して1049年に死去した。彼の死後、12世紀には早くも衰退の兆しが現れ始め、ラグラス修道院に帰属、さらに15世紀には地震などによる被害もあって、明らかな衰退のうちに、モンセラート修道院と合併している。大革命の際には近隣住民の略奪にあい、荒廃にさらされるままとなって放棄された。ようやく20世紀になってペルピニヤン司教マリー・ド・カルサラード・デュ・ポンによって修復作業が始まり（1902年から）、さらにドム・ベルナール・ドゥ・シャバンヌ神父が修道院の維持・修復を引き継いだ（1952年から）。現在では「至福共同体（La Communauté des Béatitudes）」が修道院で宗教生活を実践し、

ここを維持管理している。

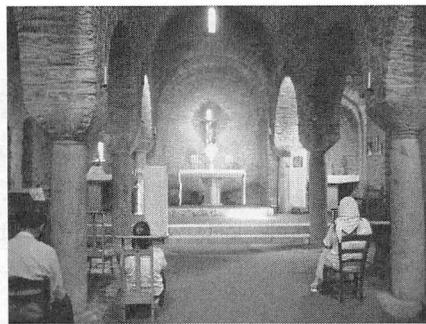
訪問は、カステイユから登山道を登るところから始まる。徒歩で片道およそ45分かかる。四輪駆動車をチャーターすることもできるようであるが、ここはやはりカニグー山の広大な眺めと新鮮な空気を味わいながら歩いて登るのが望ましい。教会と、教会本体に比べてがっしりとして大きい塔が迎えてくれる。受付で入場料を払い、修道士の案内によって内部を見学する。最初に通るのは、カニグー山のパノラマを見渡すことの出来る列柱アーチのギャラリーである。セラボンヌ（セラボーナ）のそれとよく似ている。列柱の柱頭彫刻も同様で、ライオンやサル、翼と化した自分の両腕を食べるアリクイのような顔をした奇妙な動物たち。不思議な人面、横に並んで立つ修道士たちもいる。かつてここで祈りの時を過ごしていた修道士であろうか。サロメほかエキゾチックな衣装と容貌の人物たちもいる。その隣（北側）にはクロワトルがある。このクロワトルは、地形上の制約からか、正方形ではなく横長の台形である。またクロワトルには柱頭彫刻のついた柱はない（1階部分）。列柱アーケードのギャラリーとこのクロワトルは、もともとは12世紀後半のものであるが、20世紀初めの修復が始まる以前は、大半が崩れ落ちた廃墟と化してしまっていた（修復以前の荒廃した様子を撮影した写真が修道院内に展示されている）。

教会は上下2つの階層からなっていて、上部の教会は、荒い石積みと柱頭部分の高さが低い列柱アーチ、そしてその薄暗さから、まるで岩の洞窟のような印象を受ける。三廊式で、素朴に切り出した不揃いの円柱の上に大きな柱頭が載り（柱頭彫刻もそばくな植物文様）、粗い石を積んだアーチがひとの頭の高さくらいまで下りてきている。主身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。採光のための開口部が少ないため、堂内はとても暗い。ここで私たちは高地の厳肅な祈りの場にいることを実感することができる。下の教会は、太い半円アーチが連続する天井の低いクリプトとなっていて、石自体は平たいものが積み重ねられているにもかかわらず、まるで古代ローマ時代の建築物の中にいるかのような印象を受ける（アルルやナルボンヌの古代の地下回廊 *horreum* のようである）。修道院内（教会堂北側の通路、塔の近く）には、ここ創建者であるセルダニュ伯ギフレとその妻のものであるとされる墓がある。岩を人型に穿ったものである。

サン=マルタン=デュ=カニグー修道院は、セラボンヌやサン=ミシェル=ドウ=キュクサ（クージャ）などとともにピレネー東部地域を代表するロマネスク時代の修道院である。これらの修道院について考察を進めることは、ピレネーを越えたスペインとの間の文化的な影響関係、そしてまたピレネー西部地域やラングドック、さらにはプロヴァンスとの関わりなど、ここを起点としたさらなる文化史的研究にとって、最初に欠くことのできないものであると言えよう。



サン=マルタン=デュ=カニグー修道院全景



上の教会内部



ギャラリー（回廊）の柱頭彫刻

参考文献

- エミール・マール『ロマネスクの図像学』下巻、国書刊行会、1996年。
- 櫻井義夫ほか『フランスのロマネスク教会』鹿島出版会、2001年。
- 前川道郎『聖なる空間をめぐる—フランス中世の聖堂』学芸出版社、1998年。
- Aspord (Sophie) et alii, *Congrès archéologique de France, 157e session, Monuments du Gard*, Société française d'archéologie, 2000.
- Barbut (Frédérique) , *La route des abbayes en Languedoc-Roussillon*, Éditions Ouest-France, 2010.
- Dudot (Bernard) , *L'abbaye de Caunes en Minervois*, Éditions S.E.R, 1993.
- Durliat (Marcel) , *Roussillon roman*, Zodiaque, 1986.
- Durliat (Marcel) et Allègre (Victor) , *Pyrénées romanes*, Zodiaque, 1978.
- Lugand (Jacques) , Nougaret (Jean) , Saint-Jean (Robert) , *Languedoc roman*, Zodiaque, 1975.
- Mallet (Géraldine) , *Églises romanes oubliées du Roussillon*, Les presses du Languedoc, 2003.
- Poisson (Olivier) , *Promenades en Roussillon roman*, Zodiaque, 2003.